CISMOR VOICE
February 2016 vol. 21
同志社大学 一神教学際研究センター
CISMOR
Center for Interdisciplinary Studies of Monotheistic Religions

センター長報告

センター長挨拶及び活動を振り返って

4月からセンター長を引き継ぎました。2003年に一神教学際研究センターが設立された当初から参加し、これまでの歩みを肌で理解しているものの、培われてきた運営の規則、ノウハウなどについては手探りの状態の一年でした。前任の小原センター長の多方面にわたる積極的な運営を通じて成果を収めてきましたが、そのセンターの蓄積と成果を継承することに専ら取り組み、自身の対応を適宜修正しながらバランスを維持し、進むことが課題であります。

三つの一神教であるキリスト教、ユダヤ教、イスラームの研究を主として、学内では神学部、GS（グローバル・スタディーズ）研究科、理工学研究科、GRM（グローバル・リソース・マネジメント）プログラムと共同研究を実施しました。また学外ではK-GURS（京都・宗教系大学院連合）、海外ではエジプトのカイロ国立大学東洋文化研究所との定期シンポジウム（2月、カイロ大学、9月同志社大学で各々実施）により研究者間の交流を深めました。

昨年6月末にイラクとシリアを実効支配したイスラーム勢力がイスラーム国を設立、及びカリフ宣言したことを契機に宗教対立の状況は大きく変化し、この変化に対応する新しい研究の視点も必要となりました。この視点の必要性は、フランスの風刺画新聞『シャルリー・エブド』本社テロ事件、イスラーム国日本人人質殺害事件、イエメンでのシーア派勢力によるクーデターやリビア、シリア、ナイジェリアなどの混乱の中から新しく見えてきたものにも由来します。カリフ宣言がイスラーム過激派に国境を越えて影響を与えていること、それらが中東の政治体制の不安定化にこれまで以上に関係していることなど、新しい要因が生まれています。昨年1月のGRMとの公開シンポジウム“Preventing Collapse of the Middle East”（中東崩壊の抑止）、2月末の第8回ユダヤ会議『カバラーとスーフィズム―現代におけるユダヤ教とイスラームの秘儀的信仰と実践』はユダヤ、イスラームを現代社会の文脈で発展的な研究でもあります。3月の公開シンポジウム「表現の自由と宗教的尊厳は共存できるのか？―パリ、コペンハーゲンでの襲撃事件を踏まえて」は、そうした情勢を踏まえての取り組みでした。6月の笹川平和財団　笹川中東イスラム基金との共催講演でパレスチナ取材を長期にわたって取材しているムハンマド・ダラグメAP通信記者の講演「パレスチナ問題とイスラーム過激派の動向―現況と課題」では、パレスチナにおけるイスラーム国の影響力増大が指摘されました。また9月にエジプトのカイロ・アメリカン大学教授で、エジプト副大統領を父に持ち、親子共に親日家のターレク・ハーテム博士の講演「中東における宗教機関の役割と管理」が実施されました。ヨセフ・ヤハロム（エルサレム・ヘブライ大学名誉教授）による「ペンテコステの典礼におけるユダヤ教とキリスト教の対話」と題する学術講演も行われました。また加えて、11月にはカイロ大学東洋文化研究所と共同でアラビア語能力検定試験が実施され、大きな反響がありました。

こうした活動に対する支援として、海外でも著名な木下和画伯の「カイロ・ムハンマド・アリー・モスクの夜景」（日本交流基金カイロ絵画展で展示）の油絵が寄贈され、CISMORにとって大きな憩いとなっております。

三大一神教の教義と歴史を現代の文脈の中で捉えることがセンターの課題ではありますが、教義研究や歴史的研究に埋没することなく、国際交流を促進する立場を反映することにも取り組みました。今後も継続的に発展を図っていきたと思っておりますので、みなさまからの御支援を賜りたく存じます。

（一神教学際研究センター長　四戸潤弥）

公開講演会
シンポジウム
研究会
報告

非公開研究会

道徳的価値から社会的価値へ
―トルコにおける市民社会運動の人道支援活動

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【発表者】 イディリス・ダニシマズ（高等研究教育機構高等教育院助教）
【日　時】 2014年10月11日（土）14:00 - 17:00
【会　場】 同志社大学室町キャンパス　寒梅館6階大会議室

イディリス氏はトルコ最大の市民運動ヒズメト運動について、運動の傘下にある支援団体キムセヨクム（Kimse Yok Mu）の事例を交えながら発表した。

キムセヨクムは現在世界中に活動を展開しているギュレン運動に属する人道支援団体であることから、ギュレン運動の歴史的経緯の説明から始まった。オスマン帝国の崩壊とトルコ共和国の成立により、トルコは世俗主義の導入、宗教が世俗的国家の管理下に置かれるという政治的状況、西洋文明の流入という急激な政治的、文化的変化を体験した。世俗主義国家としてのトルコ共和国の成立は、神の法（シャリーア）に代わり人間の法が人を支配することを意味し、それは従来のイスラームによる統治に支えられた伝統的文化と教育の存亡の危機につながった。トルコ共和国の市民たちは新しい国家の枠組みの中で、「市民的な」宗教解釈をもってイスラーム的伝統を新たに解釈し存続させる必要にかられた。このような伝統の維持とその革新に努めたイスラーム知識人としてサイイド・ヌルスィーなる人物がいる。そしてこのサイイド・ヌルスィーが遺した『光の書簡』に影響を受け、彼のイスラーム改革をさらに近代的な解釈を加えフェトヒュッラー・ギュレン師である。彼の率いる市民運動は神への愛の許に人々へ奉仕することを目的とすることからヒズメト（奉仕）運動とも呼ばれ、現在トルコ最大のイスラーム市民運動にまで成長している。ヒズメト運動は慈善事業、ロビー団体、学生団体、ラジオ、テレビ、新聞など幅広く影響を持つが、中央的な管理システムはなく、それぞれの地域団体が個々のプロジェクトベースに活動を展開することで柔軟な対応を可能にしている。中でも人道支援団体キムセヨクムは、シリア難民支援から東日本大震災の被災地での炊き出しなど世界中で活動を行っている。

イディリス・ダニシマズ氏

しかし政治的文脈においては、ヒズメト運動は深刻な危機に陥っている。トルコは現在まで多数のイスラーム主義政党が存在していたが、いずれも解党命令や軍部のクーデターによって崩壊させられるといった事態に悩まされながらも、そのたびに新党を設立することで生き延び、世俗主義政党の汚職問題や倫理的荒廃から現在ではイスラーム主義のAKPが政権をとるまでになった。ヒズメト運動はこれらイスラーム主義政権とは断続的な協力関係にあったが、イディリス氏によれば、ヒズメト運動は社会における宗教的伝統に支えられていた諸価値の危機に対する運動であるのに対し、イスラーム政治運動はオスマン帝国崩壊以来のイスラームによる統治権の損失に対する運動であることから、両者には目的の相違があるとする。

イディリス氏は、現政権の新オスマン主義と揶揄される帝国主義的ともとれる政策への批判、ゼロ問題外交の挫折、大規模な汚職問題により勢力を失いつつあるイスラーム政治社会運動が、汚職摘発を行った警官や検察官を支持し、思想・表現の自由、透明性、民主主義の強化を要求したヒズメト運動を競走・対立関係にある市民運動と認識したことによりAKP政権とヒズメトの衝突が起こったと分析する。また最近ではヒズメト運動傘下のキムセヨクムの活動停止命令を出されるなどヒズメト運動に対する弾圧が広範囲に及び始めている現状を指摘した。

コメントでは、民主主義を支持するヒズメト運動が、一方で中央アジアの権威主義政権と強く結びついていた事実もあり、それが許せたのであればなぜ国内の汚職には声を挙げたのかという運動のダブルスタンダートな態度についての指摘があった。それについては、報告者が、次のように答えた。運動は、人道支援や教育支援を通して国際社会の市民への奉仕を重視し、そのために様々な国に進出しているが、その地域の行政システムや内政に介入しないことを前提にしている。そのような戦略があるからこそ、国のシステムや政府が変わっても、運動がその国における活動を続けることができる。例えば、運動は、９０年代にアフガニスタンへ進出を始めている。運動の活動は、タリバン政権の時も、その後の米国の侵略の時も、続くカルザイ政権の時も拡大し、現在も大きな問題はなく続いている。運動によって運営されている教育施設は、首都カブールにもあれば、タリバン政権支配地においても存在している。運動が、困難状況下にある市民に支援を持って行けるためにその地域住民によって民主主義的な選挙あるいはそれ以外の何かしらの方法で承認されている支配層から許可をもらわなければならない場合もあったりする。仮に、その勢力に権威主義的な傾向があったとしても、運動は市民への支援ができるためにその勢力との対話に強いられることになる。だからと言って、運動について、特定の勢力、とりわけ権威主義政権と強く結びつくという評価は必ずしも適切ではないと思われる。

（京都大学大学院　山本直輝）

公開講演会

古代エジプトで愛された異郷の神々　―比較と翻訳

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　日本オリエント学会
共催：　同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】　田澤恵子（公益財団法人　古代オリエント博物館研究員）
　　小原克博（同志社大学教授、一神教学際研究センター長）
【日　時】　2015年1月11日（日）13:00 - 15:00
【会　場】　同志社大学今出川キャンパス　神学館礼拝堂

田澤恵子氏

田澤氏は、古代エジプトにおいて異郷の神々が、どのように受容されていたかについて説明した。

古代エジプトの神々には体系的な神話が欠如しており、他の文化圏で見られるように、創世神話や人類誕生の物語などは神話の中心に位置していなかった。「ひとつのものは必ずふたつのものから成り立っている」という二元論に基づいて、エジプトを上下に、ナイル川流域を東西に分けて、神々も男神と女神がペアとなるかたちで理解された。それらの神々はエジプト全土で信仰される遍在神（オシリス、イシスなど）ないし特定の地域との結びつきが強い地方神（バステト、クヌムなど）であった。当時の王権に深く関わった神々もいれば、一般の人々の生活に寄り添うような神々もいた。神々は、顔が動物（特定の動物が特定の神と結びつけられていた）である半人半獣、動物そのもの、また人間の姿と、3つの方法で表現された。

おそらく中王国時代から新王国時代前半（1550 B.C.頃）に、カナン（現在のシリア・パレスティナ）から六柱の神々（バアル、レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、ケデシェト）がもたらされ、特に、エジプトのデルタ地帯に成立した外来のヒクソス王朝（1650-1580 B.C.）や、トトメス3世（1479-1425 B.C.）の17回のカナン遠征が、異郷の神々の伝来した大きな原因であった。シリア・パレスティナを治める際にその地方神をエジプトが取り込んでいき、おそらく、土地を安寧に治めるために地方神の機嫌をとることが推奨された。また当時エジプトに存在しなかった戦車と馬が導入される際に、エジプトにはこれらを司る神々がいなかったため、レシェフやアシュタルテのような神々が「パッケージ商品」（Package deal）として同時にもたらされた、との理解もある。これらの神々は、支配層や自発的に移住していた職人、戦利品として連行された人々によって持ち込まれた。神々は石碑、彫像などに図像として描かれ、パピルス、レリーフなどに銘文が刻まれた。

それらの資料では男神であるバアルは軍隊や川の名前として採用され、「バアルの如く」という表現が、王の強さ、偉大さを誇示するために使用される。シリア・パレスティナで「豊穣神」や「天候神」として祀られたバアルであるが、エジプトでそういった属性は見られず、王朝神として描かれる。武器をもった右手を上げ威嚇するような姿で通常描かれるバアルは、エジプトでは両腕を下し、権威の象徴である杖をもつ姿で描かれる。エジプト的に描かれる一方で、円錐形の冠の頂部からリボンを垂らす、西アジア的な要素なども見られる。姿の脇にある碑文にはセト神と書かれ、バアルはセト神と同一視されていたことも伺える。

また西アジアで非常に有名な女神であったアナトは「天空の女主人」というエジプト土着の女神に普遍的な「エピセット」（形容辞）をもち、ラメセス2世の神母として「王の母」とも呼ばれた。王の肩に手を置き、守護している彫像も見つかっている。アナトは、エジプトの大神の娘のように表現されることもあり、その例として、「（太陽神）ラーの娘」、エジプトにおいて遍在神と地方神の両方として認識されていたプタハの名を冠した、「プタハの娘」というエピセットが挙げられる。そして西アジアにおいて戦闘の女神という点が強調されるのに対し、エジプトでは、戦闘という属性の代わりに治癒女神としての側面が強調された。また女神であったアシュタルテはエジプトの王妃の称号を転用した「二国の女主人」というエピセットを有した。この二国とは上下エジプトのことである。アナトと同様に、彼女の名前は第19王朝の王ラメセス2世の子どもたちの名前に散見される。アシュタルテは手に武器と盾を持つ騎馬姿で描かれる。現在のシリア西部の地域から出土したウガリット文書では、彼女の図像はないが、椅子に腰かけているという描写は存在する。必ずしも馬上の姿で表現されるだけでなく、武器の代わりに杖をもつ戦闘的でない様子も見つかっている。シリア・パレスティナで「神聖な」という形容詞は、エジプトにおいて「ケデシェト」という名で独立した女神として、アナトとアシュタルテと三柱の女神として共に描かれる。この三柱の女神は、エジプトの大女神であるハトホル神へと収斂していった。田澤氏はこの収斂について考察し、ハトホルという固有の神ではなく「母なるもの」という「単一神」とも言えるような枠組みの中に、三柱の女神が受け入れられていったとの理解に近年に至っている。

古代における神々と人間の関係は、貢納関係（Tributary Relationship）、つまり、貢物に対し恩恵を返すという互恵的な関係であったと考えられている。人間から神々に供物や儀礼が捧げられ、神々は人間に五穀豊穣、家内安全、戦勝などを与えたと理解されていた。エジプトにおける神々と人間の互恵関係の中に、シリア・パレスティナの神々も組み込まれていった。そして取り込まれる際には、元々の形のままで導入されるのではなく、翻訳的適応（Translative Adaptation）、つまり、導入された場所における必要性に応じて適宜修正・変更が施されて、受容されたのである。　　（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

公開講演会

動物・妖怪の文化比較
―日本文化と一神教文化をめぐって

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　テュービンゲン大学同志社日本研究センター（TCJS）
共催：　同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Michael Wachutka （テュービンゲン大学同志社日本研究センター所長）
　　小原克博（同志社大学教授、一神教学際研究センター長）
【日　時】2015年1月29日（木）16:00 - 18:00
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　クラーク記念館2階チャペル

Michael Wachutka氏

まずWachutka氏が講演を行った。現代日本の言説において「妖怪」という言葉は、様々な神秘的な現象を表現する包括的な言葉として使われる。

古代から日本の宗教的、世俗的言説には、説明不可能な現象と神秘的な生き物がよく現れてきたが、鎌倉時代までは妖怪自体よりもそれに脅かされる人々や、超自然的なものを鎮圧することに強調があった。

江戸時代には、百科事典的言説の一部として『和漢三才図会』などが現われた一方、口述の娯楽だった百物語怪談会が大衆の人気を得て語りが採集、出版され、国中に広まった。鳥山石燕は百科事典的作品を著す一方、読者と出版社の要求に応えて妖怪を考案もした。

明治時代には、日本が近代国民国家になるために超自然的信仰を理性的に説明し、取り除くために、井上円了が妖怪学を起こした。例えばこっくりの流行に対して、井上はそれを人間の心理との関係で語り、迷信と非難した。

20世紀に入ると、柳田國男が民俗学を確立し、文化的なアプローチをとった。柳田は妖怪を迷信として否定するのではなく、消えつつある民間信仰の体系の名残りとして収集、保存したが、それは生ける神秘としての妖怪を過去の死んだ遺物に変えることになった。1930～40年代にかけ、柳田は視点を天狗などの周縁的存在から、祖先崇拝、稲作、定住を特徴とする均質でまとまった主流の人達へと移した。それは各地の超自然に関する人々の捉え方を再定義し、日本人全員が共通して祖先に対して持つ心持の産物とした。この結果、国家が国民のアイデンティティの本質を定義しようというレトリックへと取り込まれ、象徴的な形で天皇を生き神とすることと繋がった。

そして経済が急速に発展、工業化した戦後には、妖怪は消えつつある過去の遺物としてに加え、無垢であった真の（戦前の）日本を思い起こさせるものすなわちノスタルジーとして想像される文化的過去へのアクセス手段となった。そして妖怪は飼いならされ、大衆文化の中で消費されるようになった。

妖怪に関する言説の伝承の変化の例として、天井舐めの例では、妖怪が伝統と個々人の創造性のやりとりによって生み出され、変化していくことがわかる。また人面樹の由来を辿ると、日本における妖怪の歴史が常に国や文化を越える特徴を持っていたことがわかる。

英語の妖怪monstersの語源はラテン語のmonstrareで「あらわすもの」という意味があるため、妖怪はそれ自体のためだけではなく何かを表すために存在すると言える。そして日本においても妖怪は文化的な投影の中で重要な役割を持つと述べた。

小原克博氏

続いて小原氏が講演を行った。かつて宗教とはまさに動物を捧げる行為だった。中村生雄は、犠牲獣の破壊を通して神と交流する一神教的な「供犠の文化」と、それを捧げた後に共に食べることで神と交流する多神教的な「供養の文化」に分類する。

西欧の宗教学は、宗教を人間と動物を分けるものと規定してきた結果、人間をより高みに挙げる役割を果たした。しかし近年の遺伝学などにより人間の絶対性が相対化される中、人間と動物の隔絶に寄与してきた宗教研究の在り方も再考の必要がある。

一神教では、ユダヤ教は伝統的に神殿で動物を捧げていたが、捕囚や神殿崩壊の経験を経てトーラーを中心とする言葉の宗教になった。キリスト教はユダヤ教を意識しつつイエス・キリストの神学的理解から犠牲を捧げない宗教として始まった。またイスラームではマッカ巡礼の最後に犠牲祭が行われる。キリスト教以前の西洋では、ピタゴラス学派などは輪廻転生の考えから動物供犠を否定したが、主流のストア学派は人間だけがロゴスを有するとし動物との違いを強調した。このような中で育まれたキリスト教の動物観は人間と動物の根本的相違、動物供犠の廃止、メタファーとしての動物の利用を特徴とする。

日本では、東アジア一帯で見られる動物供犠ではなく放生や殺生禁断令が雨乞いにおいて採用された。このような土着的観念に仏教的な輪廻思想と不殺生が重ね合わされ、独特の自然観が形成された。また古代では人間と自然のいのちの根源的つながりが想定され、立春から秋分まで死刑が禁じられたほか、長門向岸寺の鯨鯢過去帳などの動物供養や『鳥獣人物戯画』の動物への繊細で優しい眼差しも見られる。またかつては人間と動物の共生を語る昔話を通して人間の生存が動物の犠牲を必要とすることに痛みと感謝を感じる回路があったが、明治期の近代化、産業化の中で両者のある種の対称性は崩壊し、動物は家畜化され、現在に至っている。

最後に氏は問題提起として、人間を特権化する近代的「宗教」概念の再考、文化ナショナリズムに陥らない文化比較、人間の「動物性」（身体性）を排除しない人間観・歴史観、近代的な犠牲のシステム（国家、工場畜産）に対する批判的考察の四点を挙げ講演を締めくくった。

両氏の講演の後、参加者との質疑応答の時間がもたれ、盛況のうちに終了した。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

公開講演会

Stubborn Female Identities: Stories, Narratives, and the Wagers of Political change in Pre and Post-Revolution Egypt

頑強な女性のアイデンティティー
―エジプトにおける革命前後の政治的変化をめぐる小説、物語、賭け

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Lobna Ismail (カイロ大学文学部准教授)
【コメンテーター】 岡真理 （京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
【日　時】2015年2月14日（土）13:00 - 15:10
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　クラーク記念館2階チャペル

Lobna Ismail氏

Ismail氏によれば、今回の革命には大勢のエジプト人女性が参加したが、革命後は公の場での女性の身体への暴力が噴出し、既得の女性の権利を無効にすることが目指され、選挙では非常に多い女性票が開票時に操作された。それに対してマスコミが攻撃し、また多彩な芸術的才能を持つ女性達に導かれ女性の政治・社会参加を求める動きが非常に活発化している。

エジプト人女性にとって重大な歴史的出来事に、エジプトのルネサンスの失敗と湾岸諸国への移住がある。後者はエジプトの経済的不況や政治腐敗から多くの女性らが産油国へと逃れ、そこで保守的なムスリムの考え方を身に着け戻ってきたことである。前者は19～20世紀に起こった近代化である。1899年に貴族階級出身のカシム・アミンが女性の基本的な権利として教育と男性との平等を主張し、貴族階級や上・中流階級に強い影響を与えた。1920～40年代には女性の活動家や作家が次々と現れた。ドリア・シャフィークはアラブ女性の解放運動という組織を設立、雑誌の発行や、女性の参政権を求め女性のデモを組織し国会に侵入したりハンストを行った。しかし1952年の革命後、ナセルが権限を獲得して女性の問題は重要視されなくなった。

エジプトにおいて女性の権利は時の政治、特に独裁政権に大きく左右され、かつての女性の権利を求める一連の活動は無視されてきたが、それを再び歴史の表舞台に出す活動を女性の芸術家や作家が始めている。今回の革命前後で女性を取り巻く環境は全く変わっていないが、女性が自分達の表現をし、恐れずに意見を述べるようになったことは成果の一つである。次に必要なのは政治的ではなく文化的な革命であり、特に女性教育が変わらなければならないと述べ、講演を終えた。

続いて岡氏がコメントした。エジプトは19世紀半ばに英仏の植民地状態になり、1882年、1919年、1952年には独立を、2011年には独裁政権の打倒を求め革命が起こってきた。

ラティーファ・ザイヤートの小説では、家父長主義的社会で抑圧されている女性の解放が英国の軍事的な植民地支配の下で民族的な自立性を奪われている祖国の解放と重ね合わされて描かれる。この種の描写はエジプトに限らずモロッコのライラ・アブーゼードやファティマ・メルニーシー、パレスチナのサハル・ハリーフェらの著作、またミシェル・クレイフィら男性にも共有されている。しかし日本の読者は、女性の解放は読み取るがナショナルな解放はその背景としてしか受けとめない。これは日本が植民地支配をする側であった歴史的経験が作品の読みを規定しているためだろう。ナワル・エル・サーダウィは社会主義者の観点から階級による抑圧、そしてサバルタン女性の問題を描く。つまりエリート女性がいかにサバルタン女性をインフォーマントとして自らが社会的に権力を持つための資源にしているかというその搾取まで暴く。またアリーファ・リファートは初等教育しか受けておらず、自身と同じ普通のエジプト人女性、その女性がイスラームをどう生きているのかを描いている。

最後に氏は、講演を貫くテーマがアラビア語のワタン（祖国）だとする。エジプトは1952年の革命で植民地支配からは解放されたが、その後も独裁が続き、決してワタンは自分達のものにはなっていない。ワタンの解放とは外国の支配からの解放だけではなく、社会で女性の権利が同等に認められない限り完全に実現しないと女性は戦いを続けていると述べた。

この後、参加者との質疑応答の時間がもたれ、盛況のうちに終了した。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

岡真理氏

ユダヤ学会議　公開講演会

カバラーとスーフィズム―現代におけるユダヤ教とイスラームの秘儀的信仰と実践

The New Age of Kabbalah: Kabbalah and its Contemporary Manifestations

ニューエイジのカバラー　―現代社会におけるカバラーの発現

Boaz Huss氏

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Boaz Huss（Ben Gurion University, Israel）
【日　時】2015 年2月28日（土）13:00 - 15:00
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　神学館礼拝堂

本講演でHuss氏は、カバラー（ヘブライ語で「受け取ること／受け取ったもの」）の概要を述べた後、近代には周辺的存在となっていたカバラーが20世紀後半以降、前例の無い興隆を示すことを紹介し、その興隆がニューエイジとポストモダンの文脈にあると説明された。

カバラーとは、古代ユダヤの秘儀として12世紀から継承された伝承やテキスト、実践などである。教義の中心の「神智学（Theosophy）」は、ヘブライ語の原義で「数」を意味する「セフィロート（神の属性、神の流出）」の理論である。カバラーの教義では神の世界は10のセフィロートから構成され、それらが衝突し合う時、混沌と苦難が世界を支配する。人間はセフィロートと神の世界に影響を与え、その影響が人間世界にも反映する（テウルギー（Theurgy））。人間、特にユダヤ成人男性の主な目標は神の世界の修復であり、その方法はユダヤの宗教的教義や儀礼的なやり方に従うことである。この観点からカバラーは保守的なイデオロギーと見なせる。

最初のカバラー的サークルは12世紀の南仏や13世紀初期のスペインで出現した。その起源についてはグノーシスやタルムード時代からのユダヤ思想の精巧化にあるなどと主張され、新プラトン主義やキリスト教の影響も指摘される。13世紀末のスペインで「ゾハル（光輝の書）」が記され、中心的な書物となっていった。1492年のスペインからのユダヤ人追放でカバラーが様々な地域に伝わり、ルリアが体系を発展させた（ルリア・カバラー）。17–18世紀、カバラーは世界中に拡大し、18世紀にはユダヤ教の規範的な存在となった。18世紀にはまた、ハシディズムなどのカバラーの主要な運動や、ユダヤ啓蒙主義（ハスカラー）が起こる。カバラーやハシディズムを拒否するハスカラーの影響によって、それらはユダヤ文化から姿を消したが、ハスカラーを拒否した東欧ユダヤ人共同体でその権威は保持された。

その後、カバラー近代化の動きがあった。アシュラグがその代表で、ルリア・カバラーと共産主義を合わせた教義を打ち立て、現代のカバラー的活動の起源となった。また、新ロマン主義、民族主義を採用したユダヤ人サークルは、カバラー、ハシディズムをユダヤ民族史における活力と評価した（M. ブーバー、G. ショーレム）。近代化の努力にも関わらず、カバラーは周辺的存在となり、消滅しつつあるという認識が大勢だった。ところが20世紀後半以降関心が高まり、現在も継続する。何百ものカバラー、ハシディズムの形態が、ハイカルチャー、サブカルチャーにおける様々な領域に存在する。これらネオ・カバラーの特徴とは、多様性、折衷主義（混交）、ユダヤ人に限定されない成員から構成される点、カバラーの伝統を継承しながらも、その「大きな物語」に関心を示さず、また、ユダヤの法に必ずしも結びつくものではない点、カバラーの心理学的側面や治癒力、個人の霊的安寧など実践的側面を重視する点などである。顕著であるのは資本主義の体制に取り入れられている点であり、商業化が非常に目立つ。また、ニューエイジ的な主題や実践（瞑想、仏教、ヨガなど）を取り込む。

このようなネオ・カバラーについてHuss氏は、それがニューエイジ文化の興隆と同様、ポスト・モダンの枠組みで理解されるべきだと説明した。それは西洋近代の大きな物語の弱体化と関連するものであり、例えばイスラエルでの関心の高まりは、1970年代のシオニズム、世俗的な社会主義のイデオロギーの衰退などと関連があるのではないかと述べられた。

（同志社大学研究開発推進機構助手
有期研究員　北村徹）

ユダヤ学会議　非公開研究会

Religious Issues in Historical and Textual Perspective

歴史的・史料的見地から見る宗教的問題について

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　同志社大学神学部・神学研究科

【発表者】山本孟（日本学術振興会特別研究員・京都大学）
　　大澤耕史（日本学術振興会特別研究員・東京大学）
　　神田愛子（同志社大学大学院）
　　山本伸一（日本学術振興会特別研究員・京都大学）
【日　時】2015年3月1日（土）9:00 - 12:00
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　神学館G31教室

山本孟氏

ユダヤ学会議2日目の朝は若手研究者による発表があった。以下はその概要である。

山本孟

"Communications between the Gods and the Hittite King"

古代ヒッタイト王国では、王が、神の世界と王国の間の仲介者だった。神々が国を支配するために王を代理として選んだと考えられ、王はいかに神々に仕えたかによって評価された。王は自身を神の祭司と見做し、聖なる町の神殿での祭りで重要な役割を担った。

神々の祭司として王は王国を治め、神々のためにその領地に住む人々を導く責任を有した。王は神々の要求を文書によって仲介した。このような王の役割は、ヒッタイト語の *išhiul* という名詞の語用から推測される。山本氏は、この名詞の主要な意味が、神々の礼拝を命令する「神々の法」であったことを研究で明らかにした。王は人々に義務を明記した*išhiul* テクストを発布した。このテクストは、王が王国を運営するための神々との調停手段であり、このような神権政治が確立していたことが想定される。王たちは神々といかに連絡を取っていたのだろうか。名詞 *išhiul* の使用から、神々の法を受け取る方法が2つの方法があったと考えられる。最初の方法は夢である。

太陽神への祈り（CTH374）の冒頭では、ヒッタイト王が彼の個人的な神へ嘆願を伝達してくれるよう、太陽神に祈願している。Muršili 2世の祈り（CTH378）では、国内に広がった疫病が王の父の行為に対する神の怒りによって引き起こされたものであることを知った王は、父の息子として何をする必要があるかを夢を通して語るように懇願した。

神の法を授かる二つ目の方法は神託であり、ヒッタイトでは、くじ占いや動物の内臓占いなどがあった。羊の肝臓を調べることにより、どの神が王の病気に責任があり、どのような祭儀を必要とするかの理解を試みた。

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

大澤耕史

"Interpretations of the Golden Calf Story in Exodus 32: Exploring Jewish-Christian Relationships in Late Antiquity"

出エジプト記32章に記されている金の子牛像事件が、ユダヤ教とキリスト教の双方にとって重要であることは疑いようがない。本報告でまず、両者による事件についての様々な解釈が紹介された。例えば、5世紀頃にパレスチナで編纂されたレビ記ラッバーに残された伝承によれば、イスラエルの民はまずフルに神を作るように求めたが断られたために彼を殺し、それを見たアロンが、民が祭司である自分を殺すという大罪を犯さないように子牛を作ったとのことである。この解釈では事件におけるアロンの責任が軽減されていると考えられる。キリスト教の解釈では一般的に、金の子牛像事件はユダヤ人の愚かさや貪欲さの表明であり、そのためにユダヤ人は神に見捨てられたとされている。

金の子牛像事件解釈についての先行研究の分析により、今後の研究では、分析対象を特定の時代と地域に限定する必要性が指摘された。それを踏まえて本報告では、タナイーム・アモライームの解釈と、アフラハトとエフライムに代表される4世紀までのシリア教父の解釈の比較が提案されたとともに、その具体例が示された。

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

大澤耕史氏

神田愛子氏

山本伸一氏

神田愛子

"Conditions for Attaining the True Knowledge of God: According to the *Guide of the Perplexed* III: 52-54"

中世における最も偉大なユダヤ思想家の一人であるマイモニデスは、その著書『迷える者への手引き』の最後の三章で、神に関する真正な知識への到達条件について論じている。

彼は人間の完成に関する四つの側面を検討し、最初の三つの所有、心身、倫理の完成では不十分であり、理性的徳の完成こそが、神的な事柄に関する正しい見解を獲得するために真に必要な条件であると主張する。マイモニデスは「ホフマ」（知恵）には四つの意味があり、それらは神の真実の把握、倫理的徳の獲得、実際的働きにおける技能の習得、策略と戦術の才であると説明する。法の知識と賢者の知恵は異なっており、律法と賢者の両方の見解を知った上で、必要とされる行動が明確にされねばならないと彼は論じる。一方、「知性」について、人間の完成を目指す者は、知性が常に神と人とを結びつけることを知るべきであるとする。この上からの光である知性を通して、神は人を見守り、人は神を理解する。つまり、律法の知識と賢者の知恵の助けを受け、人は上からの知性を通して神についての真正な知識に到達し得るのである。

上記より、法の知識がまず必要とされることがわかるが、マイモニデスは法が教えることの一つは、律法に書かれた全ての行いの目的は神を畏れることであり、一つは神への愛であると述べる。法が規定した命令を行うことにより神を畏れ、法に教えられた神理解を通して神を愛するのであるが、これらは真の神知識に至るための準備段階である。

彼はさらに「ヘセド」（慈愛）、「ツェダカ」（公正）、「ミシュパット」（裁き）の三つの語について説明する。ヘセドは過剰な善行、ツェダカは倫理的徳のための善行、ミシュパットは報酬あるいは罰であるが、それら全ては神の属性であり、神が人の内奥に望んだことでもある。彼はこう述べる。「真に誇るべき人間の完成は、その者の能力に応じて神の理解を得、創造の業と統治の内に現れた神の摂理が被造物に及ぶことを知る者の内にある。これを理解した後、その者は、神の業の学びを通して慈愛と公正と裁きを求めつつ生きるようになるのである。」

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

山本伸一

「イスマーイール派とカバラーの世界周期論の比較研究」

イスマーイール派とカバラーがさまざまな共通の特徴を持っていることはよく知られている。たとえば、新プラトン主義的な流出論、グノーシス主義的な「原初の人間」、文字による創造論などである。それらの中でも、世界史が周期性を持っているという世界周期論はもっとも興味深い共通点の一つである。これまでいくつかの比較研究がなされてきたが、双方に見られる類似性のごくわずかな部分を扱っているにすぎない。おもな理由は、イスマーイール派とカバラーを架橋する歴史的な証拠が極めて乏しいことにある。言い方を変えるならば、文献学的にも歴史学的も比較研究を行うほど価値のあるほどの資料がほとんど存在しないということである。したがって本発表の第一の目的は、双方の歴史的な関連性を探求することではなく、世界周期論に見られる論理構造を分析することである。7という聖なる数字に基づく世界の周期性、宗教法を歴史のパラダイムと関連させる思想、その法を相対化する反規範主義に類似性と固有性を見出す。さらにそうした論理構造が、のちに反規範主義的な性格の強い運動となることにまで議論を進める。イスマーイール派とカバラーの世界周期論は、それぞれニザール派とシャブタイ派のメシア運動のなかで現実的な意味を帯びるようになってくる。前者は11-12世紀にイラン北部で生まれたイスマーイール派の分派であり、後者は17-18世紀にオスマン帝国から各地のユダヤ人共同体に拡大したカバリストたちの終末思想である。そして、いずれも思い描いた地上の支配権を得ることができずに破綻するという点でよく似ている。その失敗は世界周期論を実現させようとして生じた必然的な結果である。本発表はニザール派とシャブタイ派の類似性に光を当てる初めての研究である。

（日本学術振興会特別研究員 山本伸一）

ユダヤ学会議　公開講演会

カバラーとスーフィズム―現代におけるユダヤ教とイスラームの秘儀的信仰と実践

Islamic Mysticism and Neo-Sufism

イスラーム神秘主義とネオ・スーフィズム

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Mark Sedgwick（Aarhus University, Denmark）
【日　時】2015 年3月1日（日）13:00 - 15:00
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　神学館礼拝堂

Mark Sedgwick氏

Sedgwick氏は、「神秘主義（mysticism）」という用語のイスラームの文脈における意味を確認し、それから古典的な意味におけるスーフィズムについて紹介、続いて、ネオ・スーフィズムについて、その起源、発展、現在の様態を説明された。

「神秘主義」という語について、1670-80年代、イスラームに最初に適用されたその基本的な意味のひとつは、個人の魂と神との間の分離を克服する様々な種類の実践である。この種の神秘主義の神学と哲学は、究極的には偽ディオニュソス・アレアパギタにその源を持ち、神秘神学に関して彼は新プラトン主義の伝統に多くを負っているが、新プラトン主義はイスラームにも見出される。スーフィズムの理論的枠組みは「流出」などを主張する新プラトン主義であるが、すべてのスーフィがこのような抽象に関心があった訳ではない。古典的なスーフィズムの基本的な特徴とは、神秘主義、イスラーム、禁欲主義、群居性、聖者崇拝の5つと言い得る。

古典的なスーフィズムが出現したのは9世紀で、今日のイラン、イラクがその地域的発端である。スーフィの実践や神学にはクルアーンやハディースに根拠が無いようなものもあった。初期においては少数派の関心だったが、スーフィズムは宗教的にも政治的にも主流派であった。しかし、19世紀に、ヨーロッパ列強の支配を免れたムスリムの国々は改革計画を発足させたが、その際に宗教的主流派は政治的主流派に取って替わられ、スーフィズムは発展に対する障害と見なされた。1950年には、スーフィズムは新しいエリートから無視され、宗教改革者からは攻撃された。しかしながらイラン革命が示したように、イスラームは重要ではないと合理化されなかった。イスラームの再燃は、最初は政治で最も明白だったが、社会においても明らかになった。近代的なスーフィズムは、元社会主義者やPh. D.などを多く抱えているなどの特徴を持っていたが、基本的に古典的なスーフィズムの5つの特徴を備える。

ネオ・スーフィズムは本質的に越境的、折衷的、混交的なものである。ネオ・スーフィズムが展開した最初の越境的空間はペルシャ語を知り、インドで過ごした西洋人が居住した西洋的イスラームだった。18世紀後半にこの空間を伸長させたのは、永遠に続く宗教形態としてのスーフィズム理解でる。その代表はW. ジョーンズで、1789年の彼の見解は二つの点で重要である。まず彼は、スーフィズムをイランの「原始時代の宗教」で、ペルシア人とヒンズー教徒によって発展され、古代ギリシアに伝えられたものとして、ペレニアルな宗教と見なした。次は、彼がスーフィズムの本質を、有神論（Theism）として知られる宗教システムとほぼ同一の、縮減された唯一神教と見なした点である。

ネオ・スーフィの集団は1911年にパリでI. アグーリによって、他の新しい集団が第一次大戦後のヨーロッパで設立された。その大部分は、西洋的イスラームという越境的空間の居住者だった。それらは非常に多様で、古典的なスーフィズムの5つの特徴を必ずしも満たすものではなかった。これらの集団は第二次大戦を生き延びて1960年代から70年代に拡大し、新しい霊的なものとして拡がって行った。1970年代、合衆国は多くのネオ・スーフィ教団の起源の地であり、1980年代までにネオ・スーフィズムは南アメリカを含む大部分の西洋世界に拡がった。移動や通信の手段が発展している現在、越境する古典的特徴を備えたスーフィズムと、元来越境的なネオ・スーフィズムとの接触は不可避であり、それらの関係は今後興味深い。

（同志社大学研究開発推進機構助手
有期研究員　北村徹）

公開シンポジウム

表現の自由と宗教的尊厳は共存できるのか？

―パリ、コペンハーゲンでの襲撃事件を踏まえて

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】近藤誠一（元・文化庁長官、ユネスコ大使、デンマーク大使／同志社大学客員教授）
菊池恵介（同志社大学大学院准教授）
【コメンテーター】会田弘継（共同通信社・特別編集員）
【日　時】2015年3月14日（土）13:00 - 15:30
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　良心館107教室

右より、会田弘継氏、菊池恵介氏
近藤誠一氏、小原克博氏

近藤氏は今回の事件をこの数百年間の歴史のうねりの中で捉えるべきであるとする。約400年前にヨーロッパで始まった近代化が世界に広がる中で、自由民主主義は人類の到達すべき最終形態と理解されてきたが、近年それが疑われる事態が生じている。ヨーロッパにはそのような理念を作り、実践し、経済発展を遂げてきた自負があり、それがある種のヨーロッパ至上主義として定着しているように思われる。その最たる植民地主義は現在では否定されるが、なお人種差別は心奥にあり、時に表出する。対してアフリカ、中東、アジアの人々には植民地支配によって虐げられた屈辱の歴史の記憶が残存する。政治、経済ではなく文化、教育で互いに人間性を養い平和を創造することを理念とするユネスコですら世界遺産登録の先進国偏重に途上国の不満が高まるなど、折りに触れ西欧支配への根強い被害者意識が噴出するのである。

また西洋の自由民主主義は物質主義的で、精神性や宗教を過度に否定するように見え、今回も表現の自由を叫びつつその表出なのではないか。自由経済と民主主義は個々人が自由に欲望を満たすことを是とし、競争により資源を効率的に使うことで皆が幸福になるとする。それで世界経済は発達したが、自由には義務が伴うというモラルの部分が抜け落ちている。それゆえ理想であるはずの自由民主主義体制に対する不信感、絶望感が生まれ、それが先進国の若者がイスラム国へ向かう一因にも思える。過激派のテロは徹底的に非難されるべきだが、自由民主主義側の問題も考える必要があり、ヨーロッパの普遍主義的傾向に対して相対主義的な発想を持つ日本が果たし得る役割があるのではないかと述べた。

菊池氏は今回の事件が本当に表現の自由への攻撃なのか問い直す。シャルリー・エブドは1968年に結成された権力批判と性的タブーへの挑戦を掲げる左派の新聞だったが、2000年代以降路線転換し、イスラームを標的にするようになった。紙面への批判に対しては革命以来の風刺の伝統の主張や他の宗教も批判してきたと反論している。フランスにおいても1972年の反レイシズム法などがあり、表現の自由は絶対ではない。つまり問題は表現の自由をめぐる文明間の対立ではなく、フランスである人々には許されないことが他の人々には許されるという二重基準にある。また風刺が社会に容認される根拠は、基本的にはそれが権力を批判する点にある。そこで誰が、誰を、どのようなコンテクストで表象しているのかが問題となる。コンテクストに関しては、国際的には西洋と非西洋の非対称な力関係が根底にあり、国内的には社会に蔓延する反イスラーム感情の問題がある。これらを踏まえると今回の事件は力関係を背景とした、表現の自由の名を借りたいじめと言える。

ヨーロッパにイスラモフォビアが蔓延した理由は、グローバリゼーションを背景とする階層格差の拡大の問題、格差拡大を背景とする移民排斥の高揚、極右の台頭で既成政党との票争いが生じたことによるイスラームの問題化であり、70年代以降の経済危機の中で、より本質的な問題から国民の目を逸らすために国やメディアにより作り上げられた。またヨーロッパの排外主義の言説は西洋のリベラルな形をとり、世俗主義、男女平等、表現の自由は普遍的価値とされ、それで排除が行われる。シャルリー・エブドが受容されるのは人種という言葉を使わず、文化的差異を強調することで議論をかき立ててきたためであると指摘した。

会田氏はコメントとして、近代と言ってもヨーロッパとアメリカでは宗教への対応が異なり、また欧米内部にも近代への様々な問いがあるとし、その自己修正力が近代の特徴の一つに見えるとする。言論・表現の自由へのテロや弾圧は絶対に許されないのは前提だが、それは他者の自由や公序良俗などに取り囲まれており、その上で政教分離との関係を含め、あるべき形が問われている。またあの風刺画が宗教の尊厳の問題なのか問い直す必要がある。見ることで判断できることも報道の重要な役割だが、日本では殆ど議論されないまま多くの新聞が転載しなかったのは非常に残念で、その判断理由を読者に提示すべきだったと述べた。

その後、小原氏を司会に登壇者によるパネル・ディスカッションが行われたほか、参加者との質疑応答の時間ももたれ、活発な議論がなされた。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

公開講演会

Palestine Question and Islamic Extremism: Issues and Challenges

パレスチナ問題とイスラム過激派の動向－現況と課題

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
　　笹川平和財団　笹川中東イスラム基金
共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Muhanmmad Daraghmeh（AP通信記者、パレスチナ・ラマッラー駐在）
【日　時】2015 年6月3日（水）16:40 - 18:15
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　同志社礼拝堂

Muhammad Daraghmeh氏

Daraghmeh氏は、パレスチナ情勢について、ガザ地区の状況を踏まえつつ説明した。

1990年代にパレスチナの指導者であったヤセル・アラファト議長がイスラエルと政治交渉していた。その当時ハマスのイスラーム民族運動はパレスチナの辺縁に存在するに過ぎず、世論調査でも12%の支持率しか有していなかった。しかし、1年を経ずして、この運動が主流の力を持つようになる。なぜなら、イスラエルはパレスチナに対し独立を認めないことに人々が気付いたからであった。その結果、第2のインティファーダとして知られる4年間の闘争が始まることになる。2007年になると、このハマスがガザ地区を支配するようになり、独自のイスラーム政府を打ち立てるが、その過程はパレスチナ政権の中枢を担っていたファタハとの厳しい抗争の結果であった。このガザ地区のハマス支配に対し、イスラエルは非常に厳しい封鎖をするようなり、両者の緊張関係は恒常的なものとなっていった。ハマスは強力な推定3万人の戦闘員をもつ組織だが、西側諸国にはテログループと数えられた。この封鎖と、それによってもたらされた緊張状態により、その後、2008年、2012年、2014年に、イスラエル・パレスチナ戦争が勃発することになった。

もう一つのイスラーム主義運動である、イスラーム聖戦機構、イスラミック・ジハードが、ハマスに次いでガザ地区で勢力を拡大ししている。イスラミック・ジハードは約1万2千人の戦闘員をもつ武装勢力である。上記二つの組織はIS（イスラミック・ステート）やアルカイダと比べると穏健派と考えられている。この二つの勢力があったことにより、パレスチナはISやアルカイダのような過激派運動から護られることになった。

しかし、ISやアルカイダのようなイスラーム過激派運動がパレスチナにおいて勢力を拡大する3つの要因がある。1つ目の要因は、イスラエルとの間の和平プロセスが行き詰まることで、2つ目の要因は、現在イスラエルとエジプトによる経済封鎖である。そして最重要となる可能性をもつ3つ目の要因は、パレスチナ近隣のシリアとイラクにおけるISの勝利である。パレスチナにおいても、シリアやイラクにおけるISの勝利が支持者を引き付けていることは事実である。実際、この動きに歯止めをかける要因も存在する。1つ目の要因は、パレスチナ人は血に染まった犠牲を伴う長い紛争に疲弊しており、自分たちの土地を解放する手段としての武力闘争に対して信念を失っていることである。人々は、イラク、シリア、リビア、イエメンで起きている流血と残虐な事件を見て、自分たちの土地でそのようなことが起きてほしくないと考えている。2つ目の要因は、パレスチナは長い独自の政治的な経験と歴史をもち、その経験によってISのような新しい冒険に対する免疫ができているということである。3つ目の要因は、パレスチナには内部の派閥抗争がない点である。つまり、他国で見られるようなスンナ派とシーア派の対立はパレスチナに存在しないことである。イラク、シリア、レバノン、イエメンにおいて、ISのような過激派イスラーム運動が急速に登場してきた背景にはそのような内部の派閥抗争がある。4つ目の要因は、ISやアルカイダのような過激派は、優先順位を高いものとしてパレスチナ問題を扱わず、彼らの主要関心事は、イラクやシリアにおける派閥抗争としている点である。

最近のある世論調査では、ヨルダン川西岸に住む人々のうち、ISがイスラーム主義を代表していると考えるのは、3%に過ぎなかった。同じ世論調査を、非常に厳しい状況に置かれているガザ地区の人々にしたところ、13%の人々がISは真のイスラーム主義を代表していると答えている。このことから、もし今後もイスラエルとエジプトによるガザ地区に対する封鎖が続けば、ISが勢力を拡大する可能性はある。

アメリカの組織である、中東難民援助ANERAの総裁は、貧血に苦しむガザ地区に住む子供の数が2014年の夏の19%に比べると、現在は31%まで上昇していると報告した。またANERAは現在、西洋諸国からガザ地区への援助資金を集めるのに大きな困難に直面している。そしてガザ地区の経済が回復しておらず、その市民の70%が仕事もない状況にある。ガザ地区においてISが勢力を拡大する可能性は存在する。その可能性は今後ハマスがイスラエルやエジプト、西側諸国とどういう関係を展開していくかに依存している。

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

公開講演会

国際協力と宗教
—ODA（政府開発援助）の現場から考える

主催：　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
共催：　同志社大学大学院博士課程教育リーディングプログラム
　　グローバル・リソース・マネジメント
　　同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】三木隆文（元JAICAプロジェクトコーディネーター）
【コメンテーター】王柳蘭（京都大学地域研究統合情報センター／
　　京都大学白眉センター特定准教授）
【日　時】2015年6月19日（金）16:30 - 18:30
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　同志社礼拝堂

三木隆文氏

三木氏は、国際協力の現場で邂逅した様々な問題について解説した。

まずODA（政府開発援助）についての説明があった。国の予算による事業であるものの、ODAのシンボルマークには「日本の人々から」（From the People of Japan）という言葉が表記されており、その運営資金は政治家でも官僚でもない、国民によって供出されている。そしてこの点を常に意識することが重要である。実際の現場に出た際、「なぜ援助をしてくれるのか」という質問を受けることがあり、三木氏は国内外でこれに答えてきた。日本の場合は、1945年8月がこの問題の出発点となる。戦後の当時は、とても回復できないような被害状況だった。EROA（Economic Rehabilitation in Occupied Area Fund）などをはじめとする様々な基金によって日本は助けられて復興が可能となったのであり、これが国際協力をする理由でもある。新幹線、黒四ダム、東名高速道路などのインフラ整備の陰には、世界銀行の支援があり、1990年にようやく完済したことはあまり知られていない。

そもそも国際協力とは、国境を越えて行われる援助・協力である。様々な形態があり、国家間でなされるもの、国と民間でなされるものがある。二国間協力や多国間協力の他に、現在では、発展途上国間での相互協力（南南協力）もあり、その有効性が着目されている。また、かつて被援助国であった国が発展成長して援助する側に立つ例の説明もあり、そのうち韓国はOECD開発援助委員会（DAC）のメンバーにもなって活発にODAを推進している。アジア・太平洋障害者センターというプロジェクトで、タイにおける障害者のネットワークを構築した際は、被供与国であるタイも資金を提供して、アジアの他の国とネットワーク構築に貢献した。

王柳蘭氏

国際協力の内容は、貧困・飢餓対策が筆頭に挙げられる。かつてアフリカには紛争や旱魃などを原因とする飢餓が発生した。次に地震、洪水などに対する災害救助や復興支援があり、被害国から要請のあった場合には登録された要員（専門家）を緊急援助隊として派遣する体制が整っている。また医療支援や難民支援、開発支援（技術協力・インフラ整備）がある。国外のODAでは、三木氏はタンザニアで、農業灌漑分野における協力事業に貢献した。日本が援助をするものの、主体はあくまでも被供与国側のタンザニア政府である。JAICAの専門家は相手国の当該機関に派遣・配置され、地道な調査と技術援助の結果、タンザニアでは灌漑技術が習得され、稲作などが定着するようになっていった。

このように被供与国で仕事を進める際、その土地の社会規範・社会風習に対する理解と配慮が必要となる。訪問する国々には様々な宗教や異なった社会制度があり、祝祭日やその理解も異なる。例えば、金曜日は日本では平日だが、イスラームが主体の国では休日であったり、平日であったとしても礼拝のための休息時間を長くとったりして、ムスリムに配慮がなされている。

コメンテーターの王氏は、文化人類学の枠組みで、三木氏と異なった視点から現場を調査してきた。王氏によると、ODAなどによる開発が、供与される民衆に負の影響の与える可能性もあり、これを解決するために対話によるネットワーク構築が必要である。現地調査により、政治経済の論理、国益からこぼれ落ちる「弱者」が宗教を通じて救済され自立したのを王氏は確認した。彼らを弱者としてのみ捉えるのでなく、むしろ彼らの生き方から学ぶことが重要である。

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

公開シンポジウム

環境問題と良心
―未来世代のために今考えなければならないこと

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
同志社大学良心学研究センター
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】小原克博（同志社大学教授、良心学研究センター長）
和田喜彦（同志社大学教授）
【コメンテーター】和田元（同志社大学教授）
【日　時】2015 年7月11日（土）13:00 - 15:00
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　良心館107教室

右より、和田元氏、和田喜彦氏

小原克博氏、四戸潤弥氏

小原氏によればキリスト教が環境問題に取り組む契機の一つに、当時の生態学的危機の原因がキリスト教の人間観・世界観にあると指摘したリン・ホワイト・ジュニアによる1967年の論文がある。それは西方キリスト教が人間中心的で、人と自然の二元論を有し、こうした自然観が改められなければ今日の環境問題は解消しないとし、別のキリスト教的見解として聖フランチェスコの精神を提案する。奇しくもその名を継ぐ現教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』（2015年6月）では、環境問題に対して責任ある良心をもって取り組む必要性が指摘され、エコロジカルな回心が求められる。

良心と和訳されるconscienceの語源的な意味は「共に知る」である。共なるのは自己の内面、他者、神であり、ゆえに良心は個別的なだけでなく、普遍的な、コスモロジカルなものとなる。聖書の「隣人を自分のように愛しなさい」は実際には普遍的に実現されておらず、様々な理由をつけ隣人の範囲が限定される。「共に知る」対象も同様で、動物や自然は長らくその対象の外部とされてきた。

環境問題は個々の内なる良心が繋がり広がる普遍的な面を獲得しなければ対応不可能であり、エコロジカルな良心を考える必要がある。空間的に見ればコスモロジカルな良心、時間的には世代間の不公平を抑制する良心の視点が必要であり、過剰に人間中心主義、現代世代中心主義でない環境的良心を探究すべきであると述べた。

和田喜彦氏はまず公害・環境問題を、産業活動の過程で発生する有害物質を地域社会に排出させることで地域住民の生活、健康、自然環境に悪影響を与える現象と定義し、中でも戦争が最も深刻だとする。

足尾銅山鉱毒・煙害事件に生涯をかけ立ち向かった田中正造は、非信徒だったがキリスト教から大きな影響を受けたとみられる。また彼は非暴力不服従運動の先駆者でもある。田中の訴えを継承した弟子達が全国で活躍し、彼の良心は伝播した。水俣病では1956年の公式発見の3年後に原因物質が特定されたが、政府は対策を講じなかった。これは未必の故意であり、水俣病は政府が起こした事件と言える。それに有名大学の教員も加担した。約20万人が健康被害を受けたとみられるが、認定者数はその100分の1である。今回の福島の事故後、政府は福島では年間20mSvの被爆は問題ないとし（通常1mSv）、爆発の原因や性質も詳細に判明していない中で恣意的な基準で再稼働に突入している。

公害事件には共通のパターンがあり、まず小動物、次に子供など弱いものから影響が現れる。被害が認定されてもその範囲の限定が画策される。コスト・ベネフィット論が導入され、本来比較できないものが比較される。被害は一様にではなく弱者に集中、または未来世代に押し付けられる。そして加害者には支援する研究者等がおり、責任がとられない。

新たな科学技術が発明されるとメリットだけが強調され、研究の自由のもと野放図に行われるが厳格な審査が必要であり、官僚や政治家には憲法の遵守を求めるべきであると述べた。

コメントとして和田元氏は、環境問題や原子力の誤用の根本に自己正当化があるとする。各々がそれぞれの立場で行動し統率されていないために最終的に矛盾が生じる。科学者はしばしば研究に没頭し、その成果が悪用される可能性まで思い至らないが、自分が全体として何をしているのかに注意すべきである。科学者、国、産業界が各自の立場を追求し、気付かぬ内に害が生じる時点までが公害であり、その後は刑事事件である。良心を持って公害や環境問題を考えられる健全な社会を作っていくべきであると述べた。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

公開講演会

A Jewish Christian Debate in the Liturgy for Pentecost

ペンテコステの典礼におけるユダヤ教とキリスト教の対話

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Joseph Yahalom（エルサレム・ヘブライ大学名誉教授）
【日　時】2015年9月3日（木）13:00 - 14:30
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　同志社礼拝堂

Joseph Yahalom氏

キリスト教において禁欲主義は偉大な徳と見做され、パウロの教えを知ったテクラが婚約を破棄し、新しい女性のイメージ像を作り上げるのに役立った。このようなキリスト教の禁欲主義の理想は、ユダヤ教に価値として共有されなかった。ユダヤ教では、異なった女性のイメージ像がトーラー理解で展開した。トーラーや律法は神の娘として表象され、彼女（トーラー）は結婚させようとする神の懇願をはねつけるのである。Yahalom氏は、中世のユダヤ教とキリスト教が緊張関係にある中で、どのようにユダヤ教の祈りや女性のイメージ像が展開したかを、トーラー授与を祝うシャブオート（七週の祭り）と聖霊降臨を祝うペンテコステ（ギリシア語で50日を意味）の典礼を中心に説明した。

殉教者ユスティヌスはパウロに倣って、創世記15章6節の「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」の解釈を採用した。それによると、割礼以前にアブラハムは信仰により義人であり、のちにアブラハムが実行した割礼の命令は、殊更に特別ではないのである。パウロが割礼について肯定的にも語ったのとは異なり、ユスティヌスはアブラハムの解釈に満足せず、アダム、エノク、ノアなどのアブラハム以前の人物たちを理解する際に、割礼のような儀礼が不要であると見做した。そしてモーセ以前の時代において義を判断するためトーラーが基準となっていなかったのであれば、イエスの到来以降もトーラーは不必要であると主張した。ユスティヌスの理解によると、金の子牛を作った罰として、神は多くの命令と共にユダヤ人にトーラーを与えたのである。パウロがユダヤ人を聴衆としたのに対し、ユスティヌスは異教徒に語ったため、二人の解釈には違いが生じたと考えられる。他方、ユスティヌスと同時代に生きたラビの教師たち（タナイーム、単数はタンナ）のノアに対する評価は分かれている。あるタンナの見解では、ノアは彼の世代との比較においてのみ義人だった。タナイームたちがノアのイメージを下げようとするのは、キリスト教との論争が理由であった可能性を否定することはできない。

キリスト教教父は、精神的なつながりを強調し、ユダヤ人がアブラハムの肉的な子孫であるのに対し、イエスの信者たちがアブラハム以前のノアのような人類最初期の人物たちの子孫であることを主張した。ユダヤ教の初期のミドラシュは、ユダヤ教の選びが他の宗教に移ったという主張に応答しており、申命記32章の「主に割り当てられたのはその民、ヤコブが主に定められた嗣業」が代表的解釈の一つである。それによると、アブラハムがイサクに相続権を渡せなかったのは、兄であるイシュマエルがいたためであった。またエサウがいたために兄弟であるヤコブへの相続権の移行も困難であったが、のちにイスラエルとなるヤコブに選びの焦点が移り、相続権はイスラエルの系図に途絶えることのない鎖として伝わっていくのである。この解釈は、畑の所有者である王が、畑を台無しにする小作人から領地を取り上げ、王の息子に与えるという枠組みで展開し、新約聖書のぶどう畑と農夫のたとえ話を思い起こさせる。

ユダヤ教のシャブオートに関しては、このような罪ゆえの拒絶という主題がシナゴーグの祈り世界で展開する。アダムは、殺人を犯した息子カインゆえに、トーラーを与えられなかった。ノアは彼の世代に人々が救済されるよう祈るべきだったにも関わらず、自身の家族のために箱舟を作った。アブラハムも同様に息子を屠るように命令があった際に、祈ることをしないという罪を犯した。こういった父祖の敬虔に対する反論は、神の娘として人格化されたトーラーの口を通して、語られた。このような神とその娘であるトーラーとの対話は、セデル・アドナイ・カナイという典礼詩にまとめられ、そこで神はトーラーの態度を和らげようと試みる。この詩文の最初期のものは5世紀頃のものであり、それらの詩文では、モーセが天に上り、トーラーを受け取るときの対話により締めくくられる。そして対話のあとに、神の賞賛とシルク（上昇）が続き、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」というケドシャの詠唱によって、礼拝者は超越的な神秘体験をしていたと考えられる。重要なのは、このような典礼的な内容がシウル・コマのような神秘主義文学の中に見出されることであり、典礼詩と神秘主義が深い関係にあったことである。

（CISMOR特別研究員　平岡光太郎）

国際会議

Values in Religion

宗教における価値

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
カイロ大学オリエント研究センター
同志社大学良心学研究センター
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】小原克博（同志社大学教授、良心学研究センター長）
Amal Refaat Youssef（カイロ大学講師）
Mohamed Hawary（アイン・シャムス大学教授）
【日　時】2015 年9月13日（日）13:00 - 15:30
【会　場】同志社大学今出川キャンパス志高館SK112教室

右から、Mohamed Hawary氏,

Amal Refaat Youssef氏

Gamal Abd El Samea El Shazly氏

小原氏によれば、最近の国際的ニュースでconscienceの語が頻出した例として、一つはトルコの海岸にシリア難民の子供の遺体が漂着した事件がある。この悲痛な現実に初めて個々人の良心が傷み、世界に共有される中で事態は変化しているが、価値の対立も生じている。もう一つはケンタッキー州の女性が自らのキリスト教信仰、自らの良心に基づいて連邦最高裁が認める同性カップルへの婚姻証明書の発行を拒否した事件である。これらの例には良心によって人々が一方向に進むわけではなく、価値の対立が見出せる。

「良心」と訳されるconscienceの語源的意味は「共に知る」で善悪の概念は含まれない。現代は簡単に善悪が色分けされ敵味方が峻別されることで、テロやそれへの報復による暴力の連鎖が止まらない。だからこそ原義に立ち帰り、共に知り考える過程が重要である。西洋の伝統では共に知る相手とは自己の内面、他者、神だったが、18世紀啓蒙主義以降は神無しに知ることも重視され、リベラリズムにはこの面もある。他方、ムスリム移民の多くは神無しに何かを知ることは考えない。神と共にある自由と神からの自由の二つの価値観の対立とも言える。氏は「良心」を拡張する必要があるとし、イスラーム的な価値と対話し得る良心の構築、対話を包摂した価値の多元主義、善悪を早々に決めず議論するための懐の深い良心の育成を提案した。

Youssef氏によれば、近年、日本のアニメはエジプトでもよく観られている。以前はカートゥーン世代で、週一度一時間しか観られず、アメリカの影響があった。その内容は現代のアニメと異なり非常に穏やかだった。また知識や価値観、情報を本から得た世代でもあった。本の内容に感化され行動をすることで、政府を動かし、時に新しい歴史も作られた。しかし今の学生は本を読むよりもアニメをよく見ている。

若者世代へのアンケートによれば、アニメに見られる宗教像に対しては、それよりも日本の想像力や世界観への関心を重視しているという。アニメを好きになったきっかけは、日本の文化や社会の特性などがうまく紹介されている点、主人公が諦めないことや友情の重視、ストーリーの深さや意外性、人間の苦しみの写実的描写などが挙げられた。また覚えているアニメの名言の中には暴力的な内容もあった。アニメは将来的に我々の世界が暴力的に振舞う一つの理由となり得ると同時に社会で知識や価値観を深めるのに役立つと考えらえる。マイナス面を除去して良心の教育、対話を可能にするアニメの活用を提案した。

Hawary氏によれば、三つの一神教は預言者や唯一の神などだけではなく、不倫（adultery）に対する見方にも類似点がある。ユダヤ教では聖書は不倫をした者に死刑を定めている。また聖書には婚前交渉を禁じる明確な言及はなく、何の処罰も課さないが、習慣の違反行為とみなされた。キリスト教もいくつかの聖書箇所に基づいて不倫が不道徳で罪とみなす。イスラーム法では不倫は一般に男女共に結婚相手ではない人との性交であり、イスラームは婚前と婚外の両方の結婚外部の性交を禁じる。

トーラーは不倫を死刑とするが、有罪判決には人格者である二人の目撃者を必要とする。聖書によれば、既婚男性が未婚女性と関係しても罪とみられない。不倫の罪は既婚・未婚男性が既婚女性と関係することである。キリスト教は結婚外部のどんな性交も禁じ、パウロは不倫をする者は神の国に入れないと述べた。しかしほとんどのキリスト教徒は、既婚者が不倫をしても神によって許され得、結婚が回復され得ると信じている。多くの文化は不倫を深刻な罪とみなしてきたが、20世紀以降、不倫を禁じる法は議論の的になっていると述べた。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

公開講演会

Governance of Religious Institutions in the Middle East: The Role of Innovation

中東における宗教機関の役割と管理

Tarek A. Hatem氏

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
科学研究基盤研究（A）「変革期のイスラーム社会における宗教の新たな課題と役割に関する調査・研究（代表：塩尻和子）」
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【講　師】Tarek A. Hatem（カイロ・アメリカン大学教授）
【日　時】2015年9月24日（土）13:00 - 14:30
【会　場】同志社大学今出川キャンパス　同志社礼拝堂

Hatem氏によれば、イスラームという言葉は平安を意味する「サラーム」に由来する。イスラームは全ての民族間の平和を説いており、その教えの一つは人々が互いに理解し合い、平和で敬意に満ちた方法で見解を交換するためにある。昨今の戦争やテロはイスラームの本質やクルアーンの教えとは全く相容れない。またイスラームとはムハンマドの宗教ではなく神の宗教であり、全ての人々や信仰者に送られたものである。それはムハンマドより遥か以前からのものであり、神が遣わした全ての使徒を通じて神に服従することなのである。それぞれの時代で預言者達は忠実に役割を果たしたが、人々はその教えを守り続けられず、神の教えと矛盾する考えや信条を混入させている。そのような逸脱の最大の理由は人々や諸制度のガバナンスの成果と諸制度の運営方法に帰する。

ムスリムの間に広まる、世俗化や宗教改革を拒否する傾向は、クルアーンとハディースによってイスラームを社会の明確な指針として位置付けているという事実と、その制度がどのように機能し、効果的に展開するかに起因するものである。預言者から直接教えられていたクルアーンの解釈や教えは、預言者の没後は口承され、ハディースとして編纂された。それはクルアーンに次ぐ法源であり、クルアーンとその注解を理解する重要なツールとみなされるが、時代を経るにつれ多くのムスリムや学者達が、クルアーンに立ち戻らずますますハディースに注釈や指針の根拠を求めるようになった結果、解釈の不毛な相違と矛盾する指針が生み出され、社会や諸制度に影響している。それゆえハディースからクルアーンと一致しない要素を取り除くべきである。

人間が神とつながることにおいて仲介者を必要としないイスラームは聖職者も宗教的権威者も不在である。クルアーンは生活のあらゆる側面に指針を提供しているが、ムスリム諸国では反対に多くの宗教的権威者やグループが勝手な解釈で社会を規制しようとしている。宗教学者や宗教制度の役割は社会の弱者を教え導く努力に端を発するが、説教の規定からコミュニティの指導権、ファトワーの発行へと拡大していった。

さらに歴史を通して、人間の手による宗教制度は政治制度による支配を免れえず、宗教的権威者達は自らの正当性を得るために政治的権力者を求めるようになった。こうした政治制度と宗教的権威との間の協調関係は社会における混乱を生み出し、その制度的な機能やガバナンスが十分に発揮されていない。

イスラームの宗教制度のガバナンスは革新を必要としているが、宗教制度の運営方法に対する新しいアプローチの根底として、知識人や宗教学者の関与と、現代に適合可能なクルアーンの新しい理解が含まれなければならない。ムスリム世界は団結してクルアーンの解釈や教えを統合するために既存の宗教的権威の改革を行い、個別的な権威の集権化を構築しなければならない。こうした宗教的権威は、様々な分野の学者達が宗教に関する知識を自然科学や社会科学と結びつけることで成り立つ。宗教制度やその職員については、イスラームの適切な知識を持っているかどうか真摯で偏らない能力面の評価が必要になる。キャパシティ・ビルディングは継続的で長期的な発展の過程となり、それには全ての利害関係者が含まれ、また個人、制度、社会のレベルにおける努力が必須である。

宗教は、コミュニティの一員かつ一個人である我々の生活を正し、その質を改善するために存在する。非難されるべきは我々の宗教の教えの解釈や宗教制度のガバナンスの実施方法であり、宗教それ自体ではないと述べ、氏は講演を締めくくった。

（CISMOR特別研究員　朝香知己）

2014年度後半
活動報告 1

主催イベント
【国内開催】

2014年10月11日（土）
▼非公開研究会
「道徳的価値から社会的価値へ－トルコにおける
市民社会運動の人道的支援活動」
講師：イディリス・ダニシマズ
（同志社大学高等研究教育機構高等教育院助教）
会場：寒梅館6階大会議室

2015年1月8日（木）
▼CISMORセミナー
「Ferguson, Missouri: What happened on August 9, 2014, and the debate that countries」
講師：T. James Kodera （ウェルズリー大学教授）
会場：神学館G37教室

2015年1月11日（日）
▼公開講演会
「古代エジプトで愛された異郷の神々－比較と翻訳」
講師：田澤恵子
（公益財団法人古代オリエント博物館研究員）
会場：神学館礼拝堂
共同主催：日本オリエント学会

2015年1月29日（土）
▼公開講演会
「動物・妖怪の文化比較―日本文化と一神教文化をめぐって」
講師：Michael Wachutka
（テュービンゲン大学同志社日本研究センター所長）
小原克博（同志社大学教授）
会場：クラーク記念館
共同主催：テュービンゲン大学同志社日本研究センター（TCJS）

2015年2月14日（土）
▼公開講演会
「Stubborn Female Identities: Stories, Narratives, and the Wagers of Political change in Pre and Post-Revolution Egypt（頑強な女性のアイデンティティー ―エジプトにおける革命前後の政治的変化をめぐる小説、物語、賭け）」
講師：Lobna Ismail （カイロ大学准教授）
コメント：岡真理（京都大学准教授）
会場：クラーク記念館チャペル

2015年2月28日（土）
▼公開講演会
「The New Age of Kabbalah: Kabbalah and its Contemporary Manifestations（ニューエイジのカバラー ―現代社会におけるカバラーの発現）」
講師：Boaz Huss （ベン・グリオン大学教授）
会場：神学館礼拝堂
▼非公開研究会
「The Invention of Jewish Mysticism: Orientalism, Jewish Nationalism, and the academic study of Kabbalah（ユダヤ神秘主義の発明 ―オリエンタリズム、ユダヤ・ナショナリズム、学術的カバラー研究）
発表：Boaz Huss（ベン・グリオン大学教授）
コメント：Doron B. Cohen （同志社大学講師）
会場：神学館G31教室

2015年3月1日（日）
▼非公開研究会
「Religious Issues in Historical and Textual Perspective（歴史的・資料的見地から見る宗教的問題について）」
発表：山本孟（京都大学日本学術振興会特別研究員）
大澤耕史（東京大学日本学術振興会特別研究員）
神田愛子（同志社大学神学研究科）
山本伸一（京都大学日本学振興会特別研究員）
会場：神学館G31教室
▼公開講演会
「Islamic Mysticism and Neo-Sufism （イスラーム神秘主義とネオ・スーフィズム）」
講師：Mark Sedgwick（オーフス大学教授)
会場：神学館礼拝堂
▼非公開研究会
「Neo-Sufism in the 1960s: Idries Shah（1960年代におけるネオ・スーフィズム ―イドリース・シャー）
発表：Mark Sedgwick（オーフス大学教授)
コメント：森山央朗 （同志社大学准教授）
会場：神学館G31教室

2015年3月14日（土）
▼公開シンポジウム
「表現の自由と宗教的尊厳は共存できるのか？ ―パリ、コペンハーゲンでの襲撃事件を踏まえて」
講師：近藤誠一（元・文化庁長官、ユネスコ大使、デンマーク大使、同志社大学客員教授）
菊池恵介（同志社大学大学院准教授）
コメント：会田弘継（共同通信社・特別編集委員）
会場：良心館107教室

2014年度前半
活動報告２

【海外開催】

2015年2月21日（土）～2月22日（日）

▼国際会議 in エジプト
【The 3rd International Conference on Values in Religion: The Role of Religions in Tolerance and Peace】

「Japanese Christianity and call for reconciliation and peace: Tokutomi Kenjiro (1868- 1927) as a model」
講師：四戸潤弥（同志社大学教授）
「Dawa(preaching of Islam) at the time of the Prophet, peace be upon him through Al-Fatihah structural analysis」
講師：サミール・ヌーハ（同志社大学客員教授）
会場：エジプトカイロ大学
共催：カイロ大学オリエント研究センター

共催イベント

【同志社大学グローバル・リソース・マネジメント（GRM）】

2015年1月28日（水）

▼国際会議

「Preventing Collapse of the Middle Eatst （中東崩壊の抑止）」

基調講演講師：Yaşar Yakış （元トルコ外相）
会場：クラーク記念館チャペル

2015年度前半
活動報告１

主催イベント
【国内開催】

2015年6月3日（土）

▼公開講演会
「Palestine Question and Islamic Extremism: Issues and Challenges（パレスチナ問題とイスラム過激派の動向：現況と課題）」
講師：Muhammad Daraghmeh（AP通信記者、パレスチナ・ラマッラー駐在）
会場：同志社礼拝堂
共同主催：笹川平和財団　笹川中東イスラム基金

2015年6月19日（金）

▼公開講演会
「国際協力と宗教 ―ODA（開発途上国支援）の現場から考える」
講師：三木隆文（元JICAプロジェクトコーディネーター）
コメント：王柳蘭（京都大学特定准教授）
会場：同志社礼拝堂
共催：博士課程教育リーディングプログラム：グローバル・リソース・マネージメント（GRM）

2015年7月11日（日）

▼公開シンポジウム
「環境問題と良心 ―未来世代のために今考えなければならないこと」
講師：小原克博 （同志社大学教授）
　　和田喜彦（同志社大学教授）
コメント：和田元（同志社大学教授）
会場：良心館107教室
共同主催：同志社大学良心学研究センター

2015年9月3日（土）

▼公開講演会
「A Jewish Christian Debate in the Liturgy for Pentecost（ペンテコステの典礼におけるユダヤ教とキリスト教の対話」
講師：Joseph Yahalom（エルサレム・ヘブライ大学名誉教授）
会場：同志社礼拝堂

2015年度前半
活動報告２

2015年9月13日（日）
【第4回国際会議】
「宗教における価値（Values in Religion）」
▼公開講演会
「A Quest for Conscience as a Capacity to Reconcile Conflicting Values（価値の対立をとりなす力としての良心の探究）」
講師：小原克博（同志社大学教授）
「Animation and shaping the young generation consciousness – Egypt as a model（アニメと若者世代の意識形成―モデルとしてのエジプト）」
講師：Amal Refaat Youssef（カイロ大学講師）
「The Prohibition of Adultery in the Abrahamic Religions（一神教における性倫理について」
講師：Mohamed Hawary（アイン・シャムス大学教授）
会場：志高館SK112教室
▼非公開研究会
講師：Ahmad Fouad Anwar
（アレクサンドリア大学教授）
Gamal Abd El Samea El Shazly （カイロ大学教授）
下村佳州紀（黎明イスラーム学術・文化振興会 代表理事）
会場：志高館SK203教室

2015年9月24日（木）
▼公開講演会
「Governance of Religious Institutions in the Middle East: The role of Innovation（中東における宗教機関の役割と管理）」
講師：Tarek A. Hatem（カイロ・アメリカン大学教授）
会場：同志社礼拝堂
共同主催：科学研究基盤研究（A）「変革期のイスラーム社会における宗教の新たな課題と役割に関する調査・研究（代表：塩尻和子）」

共催イベント
【同志社大学グローバル・スタディーズ研究科】

2015年5月21日（木）
▼公開講演会
「最近の中東情勢と日本の安全保障 ―シリア内線、イエメン情勢、そしてイラン―」
講師：中西久枝（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授）
会場：志高館SK118教室

【科研基盤研究（C）「EUにおけるレイシズムの新展開と社会構造の比較研究】

2015年7月17日（水）～18日（土）
▼映画上映&トーク
「EUにおけるレイシズムの新展開～移民排斥からイスラムフォビアへ～」

<7/17>
「ヴェールの政治学～ジェンダー・身体・植民地主義～」
映画上映『マダム・ラ・フランス』
講師：サミア・シャラ（映画監督）
会場：良心館203教室

<7/18>
「フランス・反レイシズム運動の軌跡」
映画上映『平等への行進』
講師：サミア・シャラ（映画監督）
アブデラリ・アジャット（パリ西大学教員）
森千香子（一橋大学准教授）
会場：良心館203教室

出版物・来訪者記録

【出版】

▼『一神教学際研究』（JISMOR）10（日・英）、2015年3月刊行
特集：戦前の日本におけるユダヤ教

▼『一神教世界』6、2015年3月刊行

▼『CISMOR VOICE』vol.20、2014年11月

【来訪者記録】

2015年1月

T. James Kodera
ウェルズリー大学、教授（アメリカ）

2015年2月

Lobna Ismail
カイロ大学、准教授（エジプト）

Boaz Huss
ベン・グリオン大学、教授（イスラエル）

Mark Sedgwick
オーフス大学、教授（デンマーク）

2015年6月

Muhammad Daraghmeh
AP通信記者（パレスチナ）

2015年9月

Joseph Yahalom
ヘブライ大学、名誉教授（イスラエル）

Ahmed Fouad Anwar Hassan
アレクサンドリア大学、講師（エジプト）

Mohamed Hawary
アイン・シャムス大学、教授（エジプト）

Amal Refaat Yousssef
カイロ大学、講師（エジプト）

Mohamed Hawary
カイロ大学、教授、
オリエント研究センター長（エジプト）

Tarek A. Hatem
カイロ・アメリカン大学、教授（エジプト）

お知らせ

CISMORの出版物である『一神教学際研究(JISMOR)』と『一神教世界』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでのPDFファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。

これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR最新情報を発信中です

http://www.cismor.jp

CISMORウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧いただけます。

発　行　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092
〒602-8580　京都市上京区今出川烏丸通東入　E-mail　info@cismor.jp
編　集　CISMOR事務局編集部　デザイン　髙田太